

# A Study of Kindergarten English Education in Japan with Special Reference to the Field of Language in the Course of Study for Kindergarten

教科・領域教育専攻  
言語系コース（英語）  
宮元 茜

指導教員 山森直人

## 研究の目的

過熱化が進む早期英語教育の将来を見据え、『幼稚園教育要領』における「言葉」の領域に、幼児英語教育のナショナルスタンダードを提案することを目的とした。

## 第1章 序論

文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表し、外国語活動を週3コマの教科化にするという計画が進められている。これをきっかけに英語教育の早期化はますます進みそうである。既に幼稚園でも「英語教育」を売りにする園も多く存在する。このような早期英語教育の過熱と並行して、英語教育や幼児教育の研究者たちによる幼児英語教育研究も急速に進められているが、それらの早期英語教育がどう行われ、どのような成果を残しているかといった研究はまだ多くない。種村・今村(2012)や秀ら(2013)によって行われた調査からは、英語教育の取り入れ方が、各園、各所によって様々であることが分かっている。今後の外国語活動の教科化を見据えて、現状のような幼児英語教育がさらに過熱化することが予想される。しかし、今のような幼児英語教育を続けていると、ばらつきが広がり、教育の機会均等の確保が図れなくなる恐れや、小学校との円滑な接続ができなくなる恐れがある。そこで、本研究では幼稚園で行われる英語教育にナシヨナ

ルスタンダードを提案することを目的として、今後行われる幼児英語教育に目的やある一定の共通した内容を示していく。

## 第2章 幼稚園教育と英語教育

先行研究を基に早期英語教育の現状、早期英語教育のこれまでの取り組みからその可能性、問題、限界について考察した結果、過熱の一途を辿っている英語教育であるが実際幼稚園で行われている英語教育の取り入れ方や位置づけ、実施頻度、定着度などは各園によって異なり、一貫性がないことが分かった。各園におけるばらつきは見られたものの、先行研究からはTPRや歌を取り入れることで子どもたちが無理なく英語に親しむことができることや、第一言語習得の環境と同じように働きかけることが子どもにとって負担のない自発的な発話に繋がるなど、早期英語教育の可能性も明確となってきた。そして、英語指導者や各園、各所の教員の英語教育への考え方を“ねらい”や“目的”として一貫させる必要があることや、日本語環境における英語指導の限界なども明らかとなった。

## 第3章 教育政策

本章は幼稚園における英語教育の基本的枠組みを明らかにすることを目的として、学習指導要領における外国語活動や幼稚園教育要領における言葉の領域、これらに関する先行研究を概

観し、次のことが分かった。(1)幼稚園教育要領と小学校学習指導要領 外国語活動編には共通性がある(2)同じ幼稚園児でも発達段階を考慮する必要がある(3)TPR、歌・チャンツ、絵本は幼児期の英語教育にふさわしい(4)早期英語教育のねらいはスキル面よりも「楽しむ」「親しむ」ことにある(5)園の行事や園生活と関連させた指導を行う。

#### 第4章 ナショナルスタンダードの試案

本章ではこれまでの考察を踏まえ、幼稚園教育に英語のナショナルスタンダードを提案した。ナショナルスタンダードの試案にあたって、英語教育の基となる幼稚園全体の教育目標を示すために鳴門教育大学附属幼稚園の教育課程や期の過ごし方を参考にした。ナショナルスタンダードの方針としては、教育要領から幼小の連携を見据えていること、発達段階と言語習得理論を考慮したこと、英語活動が幼稚園生活からかけ離れたものにならないよう工夫したことが挙げられる。幼稚園教育要領と外国語活動の教育要領を参考に、楽しむことや親しむことを中心としたねらいや内容を以下のように設定した。

英語を通じて、経験したことや考えたことなどを自分なりに表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度の育成を図り、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

##### 1 ねらい

- (1)英語に触れる楽しさを味わう。
- (2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを表現し、伝え合う喜びを味わう。
- (3)日常生活と関連のある英語の言葉が分かる

ようになるとともに、英語の絵本や歌、英語を使ったゲームなどに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

#### 第5章 結論

本研究におけるナショナルスタンダードの提案は、あくまで早期英語教育の過熱を収めることを目的としており、早期英語教育の過熱をおおってはならない。また、実際に英語の活動を行う際には、各園の教育目標に見合った内容の英語を取り入れる必要がある。指導体制としてはチーム・ティーチングが望ましい。続いて、ナショナルスタンダードという最低限のラインを設けることが、他の園との競争を招く可能性もある。また、早期英語教育の過熱という社会的な現象に対してナショナルスタンダードを設けることで、それをどこまで食い止めることができるかということも課題である。しかし、各園で評価を重ねることで活動内容が改善されることが期待できる。

今後は、実践を通して理論に見合った結果や効果が得られるか、また実際の園児の実態に見合った活動となっているかなどの確認が必要である。幼稚園教育は、5つの領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)が相互に作用する教育であり、ナショナルスタンダードの作成にあたって領域1つひとつを完全に分けることの限界や難しさを感じた。そのため、タイトルにあるように英語教育を言葉の領域に直接的に反映できてはいない。そこで、今後の課題として英語を幼稚園の教育の中でどこに位置付けるべきかということが挙げられる。つまり、英語を言葉の領域1つに特化させるのか、健康・表現・人間関係・環境という他の領域と関連させるのが課題と言える。